

聖書：Iサムエル4：1～22

説教題：神の箱は奪われ

日時：2015年10月25日

1～3章ではサムエルに焦点が当てて書かれて来ましたが、今日の箇所からしばらく彼は舞台の背後に退きます。サムエルが預言者として立てられた経緯を見て来た私たちとしては、いよいよ彼の素晴らしい働きが記されることを期待しますが、彼は一旦不在となり、しばらくはイスラエルの思わしくない姿が記されて行きます。サムエルが次に出て来るのは7章3節です。ではそれまでの4～6章はどのような位置づけなのでしょう。口語訳や新共同訳では「サムエルのことばは全イスラエルに行き渡った。」と訳して、これを3章の内容のまとめの言葉とし、新しい話のスタートとして「イスラエルはペリシテ人を迎え撃つために、云々」と始めています。おそらく著者は次のような意図を持っていたのでしょう。すなわちここまではサムエルがどのようにして預言者として立てられたかについて書きましたが、先へ進む前に、サムエルに導かれる前のイスラエルの状況についてしばらく書くのです。そしてそのイスラエルがサムエルのリーダーシップの下でどう導かれたかが7章から語られて行く。ですからこれからの3つの章はサムエルなしのイスラエルの状態、特にその霊的状态について記されている部分と見ることができます。

イスラエルはペリシテ人と戦います。その結果、イスラエルは敗れ、約4000人が野で打たれます。長老たちは3節で問います。「なぜ主は、きょう、ペリシテ人の前でわれわれを打ったのだらう。」この問いと答えが、今日の箇所のカギとなります。彼らはたまたま自分たちは運悪く負けたとか、相手が強かったから負けたとは考えませんでした。彼らはこの出来事の背後に主の主権的な御手と御心を見えています。ここにはどうい主のお考えがあるのだらう。主はなぜこれを許されたのだらう。そのように主を見上げ、御心を思い巡らすことは正しいことでしょう。しかし問題はその後。彼らはこう結論します。そうだ！主の契約の箱を持って来よう！あれを持って来なかったから我々は負けたのだ！あれを我々の陣営のただ中に持って来るなら、敵を打ち倒せるに違いない！契約の箱はイスラエルの過去の歴史において素晴らしい役割を果たして来ました。約束の地に入る時も、この箱を担いだ祭司たちの足がヨルダン川に浸った瞬間、川の流れはせき止められ、人々は乾いた地を渡りました。またエリコの城壁の周りを七日間黙々と行進し、指一本触れ

ずにその町を陥落させた時も、行列の中心にあったのは契約の箱でした。だから今回も神の箱が我々と共にあるなら、我々は勝利できる。それを持って来なかったことが敗北の原因だったのだと彼らは結論したのです。

人々はシロに人を送り、主の契約の箱を運んで来させます。それが陣営に到着すると全イスラエルは大歓声を上げました。ペリシテ人はそれを聞いて恐れ、8節で言います。「ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれよう。これらの神々は、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。」 ペリシテ人は自分たちが奴隷になってはたまらないと奮起して、一層力強く戦います。その結果、イスラエルは再び打ち負かされ、今回は3万もの歩兵が倒れました。前は4000人でしたから、その7.5倍です。大敗北です。しかも今回は運んで来た神の箱まで奪われてしまった！

なぜこんなことになったのでしょうか。何が間違っていたのでしょうか。先に見たように、「なぜ主は我々を打ったのか」という問いは良かったのです。しかしその結論が正しくなかった。確かに以前、契約の箱は主の臨在の象徴として大きな役割を果たしました。しかしだからと言って、これを持って行けば自動的に神の力が働くわけではありません。そのように人が都合良く神を利用できるわけではありません。このような態度は私たちにもあり得ることではないでしょうか。たとえばその一つとして考えられるのはお祈り。教会で共に集まって祈るだけでなく、個人の生活でも日々御言葉と祈りの時を持つことは大切でしょう。しかし私たちはそれによって神を自分が思う通りに操作しようとしていることはないでしょうか。神との交わりを楽しみとし、神の御声に静まって聞くよりも、自分の願いを聞いてもらうためにそのことをしようとする。そのために忙しい中、このように時間を割いて、神様、私はあなたとの交わりの時を持っているのですから、私の願いを聞いてください。あなたはこれに聞かなければならないのです！と。あるいは献金もそうです。神よ、私はこれだけ多くの献金を忠実に定期的にささげているのですから、あなたは私を祝福しなければなりません。事がうまく運ぶように導かなくてはなりません。なんならこれにもっと加えても良いのです、と。このように神を自分の思うように動かすための方便とするなら、この時のイスラエルと何ら変わらないことになりま

神の本当の祝福にあずかりたいなら、それよりも先に考えなければならないもっと大事なことがありました。それは今日の章に文字としてははっきり述べられてはいませんが、後に明らかにされます。7章3～4節：「そのころ、サムエルはイスラエルの全家に次のように言った。『もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。』そこでイスラエル人は、バアルやアシュタロテを取り除き、主にのみ仕えた。」ここにサムエルが登場して来ます。そしてそこで明らかにされるのは、当時のイスラエルの民の中に偶像礼拝の罪があり、主への不忠実があったということ、そのためにペリシテ人の手に陥っていたということです。この原則はずっと前から言われて来ました。申命記28章1節2節：「もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行なうなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上あなたを高くあげられよう。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたは祝福される。」そしてその具体的な祝福が3節以降に述べられています。一方、「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、・・主のすべての命令とおきてとを守り行なわないなら、次のすべてののろいがあなたに臨む」とあり、25節にこうあります。「主は、あなたを敵の前で敗走させる。あなたは一つの道から攻撃するが、その前から七つの道に逃げ去ろう。」まさにこの約束がその通り、ここで起こっただけではないでしょうか（レビ記26章17章も）。ですからこの時のイスラエルに必要だったのは、自分自身の反省であり、主の御前での悔い改めでした。なのにそれをせずに契約の箱さえ持っていけば勝利は得られると考えたところに当時のイスラエル人の霊的状态の低さが露呈されているのです。しかも契約の箱を持っていたのはホフニとピネハスです。全く祭司の務めを果たしていない冒涇者たちです。そんな彼らが格好だけ主の契約の箱を運んで来たからと言って、主がイスラエルに勝利を与えなければならないという義務はないのです。神からすればあり得ない話です。ですからこのイスラエルの敗北は、何の驚くべきこともない、起こるべくして起こった当然の出来事だったのです。

悲劇はさらに続きます。イスラエルが戦いに敗れ、神の箱まで奪われたというニュースを聞いてさらに二人の人がショック死します。一人は祭司エリ。息子二人の死はさぞかしショックだっただろうと思うのですが、彼にとって一番の衝撃は 18

節にある通り、「神の箱のこと」でした。息子二人のさばきについてはすでに聞かされていたということもあったかもしれません。それよりも大きな衝撃は、自分が長年仕えて来た主の宮の箱が奪われ、主がイスラエルと共におられるしるしが失われたということ。もう一人はピネハスの妻です。彼女はこのニュースに接して陣痛が始まり、無事に子供を出産しますが本人が命を失います。その際、「栄光がイスラエルから去った」と言って、生まれた子にイ・カボデと名づけます。何を指してこう言ったのかについて、21 節に「これは神の箱が奪われたこと、それに、しゅうとと、夫のことを指したのである。」とありますが、最後の 22 節では神の箱のことだけが取り上げられています。すなわち三つのニュースはどれも彼女に衝撃を与えたが、一番のショックは神の箱が奪われたことだった。自分たちは悲惨の中に置かれ、主はイスラエルから去ってしまわれた。

以上、I サムエル記第 4 章。神の箱が奪われたというこの章の出来事は当時の彼らにとってどんなに衝撃的な出来事だったのでしょうか。神の箱が奪われるとは神ご自身が持ち去られることです。力ある神が幽閉されることです。そんなことを神がお許しになるはずがない。しかし今日の章から教えられることは、もし神と私たちの関係が正しくないなら、神はそのまま私たちを祝福するよりは、ご自身の御名がはずかしめられることの方を選ばれるということです。私たちに当てはめてれば次のようなことが言えるでしょう。私たちは、神は我々の教会をつぶされることはないだろう、神の栄光がこれと関わっているのだからと考えることはできない。あるいは神はこのキリスト教団体や学校から去られるはずはない、もしそうしたら神の御名が軽んじられることにつながるからと考えることはできない。あるいは神は信仰者である私が重要なメンバーとして関わっているこの会社の事業を失敗に終わらせられるはずはない、もしそうしたら私をクリスチャンであると知っている人々の間で神の御名のあかしにならないから、と考えることはできない。あるいは神はクリスチャンホームである私の家庭をボロボロの状態にされるはずはない、神ご自身がそしられることになるのだから、とは言えないということです。もし私たちが御前に正しくなければ、神はたとえご自身に汚名が帰せられることになっても、その道を選ばれるのです。私たちは果たして誤った前提に立って日々を送っていることはないでしょうか。真に大事なことを大事にして歩んでいるでしょうか。

しかしここに一つの慰めがあります。それは神はこれでイスラエルから永遠に去

られたわけではないということです。神はここでイスラエルを敗北に追いやられましたが、それは先に見たように、7章3節でサムエルのもと、悔い改めへと導くためです。主は彼らを正しい状態へ導くために、ここで懲らしめを与えておられたのです。ですから一旦主の祝福が失われたら、もう終わりなのではない。なお主のあわれみの余地があることを覚えて、私たちは主との正しい関係に立ち返って行かなければなりません。

その一方、厳しい警告にも心を留める必要があると思います。それはエリの家とホフニとピネハスへのさばきです。彼らは悔い改めのチャンスを繰り返し退け、益々頑なになって行った様子を前に見ました。その彼らを主は永遠にさばくこと、その償いはできないことを宣言しておられました。それがその通りに実現したことをこの4章は記しています。つまり神は「さばくよ」と警告するけれども、最後にはさばかない愛の方であるというのではない。私たちは主を侮ってはならないのです。遅過ぎる時が来ない内に、一刻も早く主を恐れて、招かれている正しい道に立ち返らなければならないのです。

私たちも人生の様々な出来事の中で、3節のように、「ここに主はどんな御心を持っているのだろう」と問いたいと思います。しかし急いで結論を出さずに、まず御前における自分のあり方を問いたい。もしそれで自分の心に責められるところがなければ幸いです。しかしもし何か示されるところがあるなら、主との正しい関係に立ち返ることを第一に大切なこととしたい。イザヤ書 59章 1～2節：「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」 主は私たちが罪を保っているなら、その状態では私たちに祝福して下さりません。しかしそれが取り除かれるなら、主の祝福を妨げるものは何もなくなります。主はその時にご自身の臨在と祝福を豊かに私たちに回復して下さるのです。